

番号	役	セリフ
②	弟	「お母さん、おなかすいたよー、今日は何のおかず？」
	母	「もう少し待ちなさい、おいしいカレーを作ったから、お父さんが 帰ってきたら食べよう。お兄ちゃん、ホレホレ、テーブルの上を片 付けなさい。ホレ、ゲームばっかりしてな
	兄	「ハイ」
	ナレ	時計をながめて、いっちゃんが立ちあがった。 すかさず二郎君がゲームを始めた。
	兄	「こら!俺のゲームさわるな!」
	弟	「だって!少しさせてよ。」
	兄	「ちよこっとだけだよ。父さんが帰って来るまで。」
	母	「おいしいカレーが出来ました。」
	ナレ	お母さんがおいしそうなかレーを机に並べ始めた時、
	父	「ただいまー」
	兄	「お父さんお帰り!」
	父	「二郎、ゲーム終了、約束だぞー!」
	弟	「ハイ」
	ナレ	家族で夕食が始まりました。
	弟	「お父さん。今日ねー、学校で防災訓練したよ。」
	父	「へえー、それでお前達はどうしたのさ。」
	弟	「あのねー。放送で『地震です机の下にかくれて下さい。』というでしょ、そしたら机の下にもくって頭を抱えているのだ。」
	父	「二郎!その時に机の脚ももたんとあかんぞ。」
	弟	「そうやった、机がとんでいったらあかんもんねー。」
	兄	「お母さん、おかわりしていい?」
	母	「いいよ、でも机のない学校の行き帰りに起きたらどうするの?」
	弟	「それはねー。」 「ええっとねー。」 「やっぱりぼくもおかわり。今日のカレーはおいしいね!」
	母	「ほら、ごまかさないで。」
	弟	「お父さん、どうしたらいいの?」
	父	「そうだねー、お前達、学校の行き帰り、自分の持ち物で頭を守る 物は持っていないのかい」
	弟	「あっ、わかった、ランドセル、ランドセルを頭にのせて守ったらいいのや。」
	父	「そうだねー、屋根から瓦が落ちてくるから、早く安全な所へ逃げなあかんぞ。でも、お父さんの小さな頃も、そうだった。怖くて足がすくんで動かなかったよー。」 「とにかく落ち着く事さ。」
③	ナレ	リンリンと電話の音。
	母	「はいもしもし、はい南部です。ええっ、うそでしょう?」 「お父さん大変、岐阜のおじいちゃんがきとくなんだって。」
	父	「ええっ。」
	母	「はいはい、すぐ行きます。」 「どうしよう、一郎、あなた達二人でお留守番できる?」
	兄	「うーん、何とかね。」
④	母	「夜も遅いから、もう誰も来いから絶対カギを開けない事、いいですか、窓もきっちりカギをかけていくから。明日の朝早くお母さんだけでも早く帰るから心配しないで早く寝なさい。そうしたらベッドへ行きなさい。」

⑤	ナレ	玄関やら裏口やらをきっちりカギをかけてお父さんとお母さんが出かけた。 ベッドの中から一郎がこっそり起き出した。
	兄	「二郎、起きてるか、丁度いいや、ゲームの続きやろう。」
	弟	「だって兄ちゃん、お母さんにしかられない？」
	兄	「大丈夫、だまっていたらしかられないさ。」
	弟	「それもそうだね。」
	ナレ	二人はゲームを始めた。
⑥	ナレ	ゴトゴトゴト
	弟	「兄ちゃん、どろぼうかな？ゴトゴト聞こえたよ。」
	兄	「猫のみいやろう。」
	弟	「だって台所の方から聞こえたもの。」
⑦	兄	「お前見てこい。」
	弟	「いやだ、こわいもん、兄ちゃん、見てきてよ」
⑧	兄	「二郎の弱虫」
	弟	「それじゃ、二人で行こう。」
	ナレ	と台所の戸を開けたら、ねこのみい飛び出してきた。
⑨	兄	「ヒヤー、こらー、みい、びっくりするじゃないか。」
⑩	兄	「二郎、アイスクリーム食べようぜ。」
	弟	「お母ちゃんにしかられるよ。夜中にアイスクリーム食べたら寝小便するよって。」
	兄	「だからさ。おしっこに行けばいいのさ。」
	弟	「怖いもん。」
⑪	兄	「ばか！しっかりせい、兄ちゃんがついてったる。」
	ナレ	といいながら、冷蔵庫のアイスクリームを左手に、又ゲームを始めた。 初めての夜の留守番、二人はたっぷりゲームを楽しんだ。ポテトチ ツプスもからっぽにした。柱の時計が十一時を告げた。
⑫	ナレ	その時、又コトゴトゴーと音がしたと思ったら、机がタンスがベットが揺れ始めた。
	弟	「うわー、地震だ！」
⑬	兄	「机の下へもぐれー。」
	弟	「うーん。」
		「かあちゃん！なかなか揺れは収まらない。」
	ナレ	その内停電してしまった。
	弟	「うわー、かあちゃん、兄ちゃん、おしっこもしたなってきた。」
	兄	「バカー、しんぼうするんや。」
	ナレ	一郎君も泣きそうになってきた。
	兄	「せっかくゲームが出来ると思ったのに。」
	ナレ	ようやく揺れはが収まった。けれど家の中はまっくら。
	弟	「どうしよう。となりのおばさんに聞こうか。」
	兄	「あかん、昨日キャッチボールしてボールが庭に入って花を折ったんでしかられたも 「こわーいおばさんやから、お前らみたい知らんとまた怒るかも。」
	弟	「裏のお姉さんやったら何とかしてくれるかも。」
	兄	「あかん、あのお姉さん、夜は変な顔してるから。お化けみたいやったよ。」

	弟	「どうしよう、そうや、母ちゃんにTELしよう。」
	兄	「でも電気をつけなあかんけど、停電やし、暗くて見えん。」
⑭	兄	「懐中電気や、どこにあるんや。母ちゃんがこの間冷蔵庫の下へ十円転がしたやろ、その時使っていたから、あの冷蔵庫のあたりかもなー。」
	兄弟	「どこや、どこや。」
	ナレ	手探りで探す。
	兄	「あいたたた、なんやこれ。」 「うわあー、ゴミ箱や。ゴミ箱へ足突っ込んでしもうた。」 「きったねー。」 「二郎、ちやんと俺の後ろをついてこいよ。スリッパを履いとれ。」
	弟	「うわあー、えらいことになっとる。」 「みい、みい。どこや。」 「お母ちゃーん。」
	兄	「二郎泣くな！」
	ナレ	一郎君は、薄明かりを頼りにようやと冷蔵庫の横の懐中電気をつけました。
	兄	「二郎、表へ出ようか。」
	弟	「あかん、母ちゃんが絶対に開けたらあかんって言うとった。」
	ナレ	どこからか、みいがやって来て二郎が抱き上げた。
	弟	「お母ちゃーん。」
	ナレ	又、二郎が泣き出した。
	兄	「バカ、泣くな。兄ちゃんかて泣きたいんやぞ。でも、がまんしとるんや。」 「そうや、学校で一所、戸を開けなさいって言うとった。大丈夫や、泥棒が来んように犬のドンの家の上の戸を開けよう。」 「いつの間にこんなにきもいのやろう。」 「えーい。」
⑮	ナレ	力をいれて窓の戸を開けた。
	兄	「あれーとなりのお婆さんの家が傾いている。」
	弟	「大変や、お婆さん大丈夫やろか。」 「兄ちゃん、こんな時のことを父ちゃんが言ったんや。落ち着けて！」
	兄	「二郎、頭を守れ。座布団を頭にのせて、まず服を着替えよう。」 「次は、靴や。靴を履け。」
	弟	「探検ごっこみたいやなー」
	兄	「バカ、早ようせんとあかん。」
⑯	ナレ	その時、表の戸をドンドンと叩く音がした。
	弟	「どろぼうや。」
	兄	「こんな時どろぼうが来るか。」 「あれ、隣のお婆さんや。」
	弟	「ほんなら、ゆうれいや。」
	兄	「バカ。」
	お婆	「おーい、おーい。あんたら大丈夫か。」 「隣のお婆さんや。開けれるか？」 「あかん、戸が開かん。」
	兄	「犬の所を開けたよ。」
	お婆	「外へ出れるか？」 「夕べ、お父さんとお母さん、出かけたやろ。出かける時お母さんが来てな。頼んで行かはったでなー。」

	ナレ	おばさんがまっくろになって来てくれた。
	おば	「こわかったやろう、こわかったやろう。」
	ナレ	と言いながら抱きしめてくれた。 でもその姿に、突然笑い出した。
	おば	「又えらいかっこやなー。まるで戦や。よう出来たる、よう出来たる。ほうびもんや。」
⑰	ナレ	大きな口を開けて笑われてしもうた。 二人もその声につられて、半分泣きながら大笑いした。 となりのおねえさんも、あんたら大丈夫かとかけつけた。いつもきれいに化粧してるのに、ちがう人みたいやったが、声はとなりのおねえさんやった。
⑱	おねえ	「びっくりしたなー。おばちゃんえらい事や。非常持ちだし袋の用意しとらんだのさ。」
	おば	「そんな事やと思うとったわ。化粧品ばっか用意しとらんと、普段から用意しとかなあかんさ。」
	ナレ	となりのおばさんが大声でどなった。
	おば	「この子らのかっこみてみいなー。子供やのにえらいがな。ほんで、手に何持っとんの
⑲	弟	「ゲーム。」
	おば	「なんや、ほめる後からこんな事や。」
	兄	「あっ、ちよっと待って。」
	ナレ	一郎が家へ走ろうとしたその時。又ゴトゴト揺れだした。
	おば	「行ったらあかん、ここにおろう。少しくらいなら、おばちゃんのあげるさかい。皆で分けたらええ。その内、何とかなるからな。」
	ナレ	頭を寄せおうて四人でその場に固まってしもうた
⑳	ナレ	自治会長さんがやってきた。
	会長	「大丈夫ですか。皆で学校へ避難しよう。一郎君、よーがんばったなー。二郎君の手を離したらあかんでー。二郎君もおばあちゃんの手をしっかりとつかまるんやぞー。よしこちゃんおばあちゃんの荷物半分持たれよ。俺も持ったるわ！そやけど、何をようさん持っとんやなー。重たいなー。」
21	おねえ	「ちよと待ってね。貼り紙していくわ。」 「よし子です。第一さくら避難所へ行っています。」
	兄弟	「一郎、二郎は第一さくら避難所です。」
	おば	「伊藤とらです。第一さくら避難所です。」
	ナレ	三枚の紙切れを玄関に貼った。
	おば	「こうするといいのよ。」
	会長	「よし、俺が家のブレーカーを切ってきたるでな。」
	ナレ	と、自治会長さんが言ってくれた。
	会長	「さあ、行くぞ。」
	ナレ	まるで探検隊みたいに、避難所へ向けて出発した。